

二〇三三年九月二二日

此処もまた墓仕舞らし秋彼岸
新蕎麦を啜る馴染みの古暖簾
吹き抜けに秋日傾くコンサート

なつき
たか子
康子

二〇三三年九月二二日

帰省子の歯ブラシ一本忘れ物
石庭にいくともなく初紅葉
背を撫づる猫の機嫌や十三夜
新走り潜るのれんの芳しき
敬老日笑顔をくれし歯抜けの子
一陣の風に萩叢右往左往
荒園の一隅照らす蛍草

なつき
康子
素子
智恵子
なつき
ぽんこ
もとこ

二〇三三年九月二〇日

緑青の宮屋根秋の日に反りぬ
毬栗の径に転がる森の朝
終電の灯の遠ざかる虫の闇

ぽんこ
澄子
うつぎ

二〇三三年九月一九日

長き夜を祖母に手ほどきするスマホ
久闊の握手を交はし野路の秋
夜食いま版下を待つ編集部
尺蠖の帽子の縁を一巡り
黄昏の日に影伸びる藁ぼっち
紅芙蓉きりと絞り今日を閉づ
ベルの窓合はせ鏡に秋の雲

愛正
たか子
むべ
うつぎ
素子
満天
ぽんこ

二〇三三年九月一八日

終電車男ばかりや秋暑し
幾たびも読みかへす文秋灯下

うつき
澄子

二〇三三年九月一七日

眠る児の長き睫毛や秋灯下
塚なせる無縁仏に秋茜

澄子
うつき

二〇三三年九月一六日

また葉飲み忘れして秋愁ふ
ひよつとこ面なる洋梨を供へけり
生駒嶺を湧きいづるやに鱗雲
秋日傘傾げて会釈屋敷町
たて縞の背番号着し案山子かな
大いなる石文に散るこぼれ萩
遠富士の全容見ゆる星月夜

明日香
うつき
あひる
かえる
小袖
せいじ
澄子

毎日句会みのる選・二〇三三年九月二四日